

地元の神主として祈り続けて23年

生きることは 変わることに

色とりどりの落ち葉や形の違ったどんぐりが、みのゝれの大きな木から舞い降りて、こどもたちにとってこの季節は宝の山ですね。小春日和の暖かな日には、ぜひみのゝれに遊びに行きましょ。今回は、20年前にみのゝれが誕生する際に発刊された「文化がみのゝれ物語」執筆者の一人、小美玉市寺崎にお住まいの篠崎弘さんをご紹介します。



文化がみのゝれ制作委員会

しの ぎき ひろし
篠崎 弘 さん

みのゝれと共に生活するスタイル
Minole Life
のすすめ No.194

米・露地野菜・栗などを栽培する専業農家であり、みのゝれが建っている部室（へむろ）周辺を鎮守する貴船神社の宮司を26歳から務める篠崎さん。「自分で作物を育て収穫したときに喜びを感じます。晴れの日もあるし、雨の日もある。常に神様に感謝しています」と話します。

農業と宮司の仕事で毎日充実しているという篠崎さん。歳を重ねたら、神主は後継者に任せてゆくりしたいそうです。「私の先代も90歳まで仕事をしていましたからね」と苦笑い。

農家を継いだのは、幼い頃から家業を継ぐ期待を掛けられたから。神主になったのは、神主を務める親戚が後継者不在で困っており「やってみないか」と声を掛けられ

たから。期待に応えなくなる性分なようで、文化がみのゝれ物語制作委員会に加わったのも、同級生から「ぜひやってほしい」と頼まれたからだそう。

篠崎さんは、文化がみのゝれ物語の第7章「まわりからみた文化センターへのそれぞれの想い」を執筆。「僕は反対派の一人です」から書き始めていたのですが、反対していたのは親で、その想いを代弁したくて書きました。同じく7章の『未来へのシンフォニー』に『年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず』という言葉を書きました。これは、花は毎年同じように咲くけれど、人はどんどん変わっていく、という意味です。生きることは変わることに。人は変われる可能性を持つていくということです。みのゝれが誕生してからは、反対派の人だんだん気持ちが変わっていったように感

じます。反対していた親も、孫の発表会でみのゝれに足を運んで喜んでいましたね。

篠崎さん自身も、年に一度、神社総代会でみのゝれを利用しています。誕生してから成長を続けるみのゝれを「早く予約しないとホールが取れないくらい人気があるというのは本当に凄いことだと思います。みのゝれが誕生する1年前に、地元（部室）の貴船神社の宮司になったというのも縁を感じます。神社総代会の日は、神社でお祓いをしてからみのゝれに来てくれるですよ」と笑顔で話してくれました。

篠崎さん、20年以上地元の宮司としてまちを見守っていただきありがとうございます。これからみのゝれの健全な成長をお祈りください。（藤田佐知子）